

華僑学の構築をめぐつて——その視座といくつかの方法

華僑・華人は中国の変化とアジア諸国の自立化が進む過程で新たな展開を見せつつある。この動向を、彼らをとりにまく歴史を踏まえて、どう認識し分析するか。新しい視座と方法としての「華僑学」構築の可能性を探る。

王 廣武 (アジアカンボール国立大学) × 斯波義信 (東京大学名誉教授、財団法人東洋文庫理事長) × 濱下武志 (京都大学東洋学)

陳 天璽 (国立民族学博物館) × 曾 纓 (元アジア文化研究所 多員研究員 現在在米) 司会 編集部 高橋五郎 (愛知大学現代中国学部教授)

編集部 王廣武先生、今日はこの座談会のために、わざわざシンガポールからお越しいただきありがとうございます。王先生はご承知のとおり、華僑・華人研究の分野では世界的な第一人者でいらっしゃいます。斯波先生には、王先生をお招きすることやこの座談会の実施について、さまざまなアドバイスをいただきました。また濱下先生には大変ご多忙のところ、今日も座

談会が終わったらすぐにインドの方へお立ちになるということで、貴重なお時間を割いていただきまことにありがとうございます。陳さんは若手の華僑・華人研究者の一人で最近『華人ディアスポラ』(明石書店、二〇〇二)というご著書を行になり、私も読ませていただき、新鮮な発想と丹念な記述に感銘いたしました。

今日は、最近になって王先生や斯波先

生などをはじめとして使われるようになった「華僑学」という分野をめぐつての視座や方法について話し合ってみたいと思います。新しい華僑・華人研究の方法をいかに作り上げるかという、少々野心的なテーマといってもいいかも知れません。

「華僑学」という言葉自体、現段階では正確な言い方でもなければ、学会の常識用語として定着しているわけでもありま



.....王 廣武 [Wang Gengwu]

せん。「華僑」という言葉の持つ一面性を強調することになりやすいし、この言葉だけでは「華人」や「華裔」はどこへいったのか、ということにもなりかねません。ここでの「華僑学」という言葉は、「華人」も「華裔」も含めた省略用語のつもりで使っているのですが、誤解を招きやすい言葉であることは避けられません。ですから、今のところ「華僑学」という言葉は、私自身の理解の中でも暫定的な用語の域に留まっております。もしかしたら「華人学研究」(Ethnic Chinese

Study)あるいは「海外華人研究」などといった方がよいのかもしれない。はたしてどのような表現法が、この分野の研究方法を最も適切に表すのか、私にはよく分かりません。

このような問題意識の背景には、グローバル化の波が各地の華僑・華人にも及びだし、かつ市場経済競争の一層の浸透が華僑・華人の国際的枠組みに変容をもたらし、その再編成を促しているのではないかという、私なりの仮説があります。そこには、華僑・華人同士の熾烈な競争が起きているのではないでしょう。

とは言いますが、この分野の方法論を、冒頭で申し上げた広い意味での「華僑学」として捉えようとすれば、全体を構成する周辺の研究部門、たとえばビジネスネットワーキング論、文化論領域、社会学、民族学、アイデンティティ論、民俗学、人類学などなど、広範囲な分野について目配りする必要があります。これらの部門での研究蓄積を踏まえながら、総合した方法論(「華僑学」)を検討

するのは大変なことです。したがって、今日の議論だけでは無理でしょうが、その入り口を探ってみようと思い、先生方にお集まりいただきました。あわせて、現在とくにご関心をお持ちの点についてもお話しただければありがたいと思います。

斯波 最初に、王先生に今日のテーマに関してどのようなご意見をお持ちか聞いて、その後でそれを参考にしながら議論を進めてはいかがでしょうか。

◆華僑学研究三つの視点

王 そうしましょう。しかし私は「華僑学」の新しいあり方が現在どのような状況にあるかを評価することはできません。それは私にとっても非常に難しいことです。このテーマに関連して、自分にも関心のある三つの視点をまず述べてみたいと思います。

第一は、ご指摘のあったようにこの研究にはさまざまな研究分野、たとえば文化上のアイデンティティ、民族学上の研

究、そして最近とくに広汎な展開を見せつつあり、華僑・華人の経済的活動の土台になっているビジネスネットワーク論などが関連しています。これらの研究は華僑・華人研究を行う上で最も大きな分野の研究です。

第二は、これも私自身にとって非常に関心の高い分野ですが、中国国内でのこの課題についての研究と区別することが重要だということです。こうした点を念頭において、中国国内での華僑・華人研究についての現状を考察する視点を持つという点です。これは、中国以外で行われている研究とは別に扱う必要があります。華僑・華人研究については、中国国外に住む多くの研究者が、さまざまな方法を使って取り組んでいます。

彼らのほぼ八〇%の研究者は、中国国内とはまったく異なった方法でこの課題を研究しているように思います。アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリア、日本に住む華僑・華人が彼ら自身を見つめるために、他とはまったく異なった方法で、この課題に取り組んでいると思ってい

でしょう。華僑・華人について、時には批判的な目で時には肯定的な目で。

第三は、自身はまったく華僑や華人ではない人々による華僑・華人研究です。そして彼らもまたそれぞれ異なった見方によって研究しているのが実態です。というのは、外国人は、それぞれこの課題について異なった関心や見方を持っているからです。

これら三つの視点を全体的に見ると、この課題に関する研究方法や視点は大変複雑だと思えます。この課題研究には、ともかく非常に多様な見方を持つ人々が参加していると思えます。しばしば、非常に多くの課題や問題について、互いに交流することなく、それが行われているといつてよい場合も少なくありません。ある人々は同じ問題を扱いつつも、互いに無視をし、あるいは主張をめぐって綱引きをしています。見方によって結論もそれぞれの状態です。

このように、華僑・華人研究において、なぜ、研究者がさまざまな見方を持っており、まとまることのできないので

でしょうか。いかにこの疑問に答えるべきでしょうか。それは難しいことです。というのは、何といても異なった見方を統合することがないからではないでしょうか。この問題は本日の議論の課題そのものでしょう。

ですから、先ほど挙げた三つの観点について、私自身、非常に大きな興味があるのです。もしそれぞれの異なった研究方法を持ち寄って比較し、そして統合できればよいと思えます。たやすくできることではありませんが、それはけつして、異なった意見の持ち主の、固有の意見を侵害することにはならないと思えます。

その際に必要なことは、それぞれの方法上の意見のうち、何が共通であるかを認識することでしょう。この点では、最も知られているビジネスネットワークについて考えることはいいことかもしれません。特に東南アジアでは中国ビジネスについて大きな関心が集まり、その担い手の多くが華僑・華人であるからです。東南アジア以外、たとえばヨーロッパやアメリカ、あるいは日本では、それほど

ではありませんが、東南アジアでは大きな力があります。その点に注目することです。ヨーロッパやアメリカ、あるいは日本で華僑・華人ビジネスはマイノリティですが、東南アジアではそうではありません。

ビジネスネットワークはこの事実と無関係ではありません。しかし香港、台湾、マカオに住む人々をどう見るかという点は非常に複雑な問題を持っていて、一応区別しておくべきでしょう。もしこれらの人々を華僑・華人として含めると間違った見方をしかねません。しばしばこうした見方をする研究者がいますが、問題をさらに複雑にするだけです。というのは、香港、台湾、マカオに住む人々は華僑・華人ではなく中国人として位置付けるべきで、これらに住む人々の活動についての研究も、中国研究の部分として捉えるべきで混同してはなりません。したがって、華僑・華人という場合、中国の外部にいるマイノリティとして捉えるべきだという点が明らかになります。これが華僑・華人研究の基軸となるでしょう。



..... 斯波義信 [Shiba Yoshinobu]

う。

ビジネスネットワーク論研究を行う場合、マイノリティとしてのネットワークであり、しかも中国、台湾、香港のビジネスの影響を受け、東南アジア独自の局面もあり、それぞれがミックスして成り立っているのです。一層複雑なのです。そうした環境のもとで、華僑・華人がどのように活動しているか、どう成功し、どう失敗しているか、これが一つのこの課題をめぐる視点です。

香港、台湾などを含む中国人と一緒に

研究することは非常に興味あることです。この方法はある意味では比較研究になります。それぞれが異なった政治制度や条件のもとにありながらもマジョリティとしての経済活動をしているので、比較することが一つの視点になります。そうした条件のもとで、いかに異なった経済活動をしているのか、という視点です。この観点に立つと、シンガポールはマイノリティとして位置付けられるべきです。華僑・華人研究者の中には、香港や台湾人と同様に、マジョリティとして見る人もいますが、それは間違っています。シンガポール人は政治的・文化的に独自のアイデンティティを持っていません。もちろん、彼らなりの問題を持っています。もちろん事実です。シンガポールはマジョリティとしての中国人の側面は持っていないのです。この意味で、*“Ethnic Chinese”* はシンガポールにも当てはまるわけではありません。

私は華僑・華人研究にあたってマジョリティとマイノリティとの区別と両者の関係をどう見るべきか、という問題は非

常に難しいと思いますが、この視点は大事だと思えます。

編 王先生は、おおまかに分けると華僑学をめぐって留意しなければならぬ三つの観点について述べられました。とくに、ある地域とくに東南アジアにおいて、彼ら中国系の人々がマジヨリティまたはマジヨリティに属する民族を占める場合と、マイノリティにとどまる場合とをしつかりと区別して取りかかる必要があるということ。その違いが、意識の持ち方だとか行動規範そして実際の行動面に影響するからだということだと思います。

また東南アジアといった場合、香港、台湾、マカオの人々が、華僑という定義から除かれるべきだというのはおっしゃるとおりです。また中国人としてのマジヨリティと、そうでないマイノリティとしての華僑・華人との区別について言及されました。王先生のお話を敷衍すると、華僑・華人研究はマイノリティ研究でもあるということになるでしょうか。

◆類型化と比較の視点

ス波 華僑の定義をめぐる王先生の意見に賛成です。ただ、いささかの蛇足を加えさせて下さい。それは研究にあたって、類別と比較という手順も合わせて考えた方がよく、そのひとつとして人口比率とか人口サイズという問題もあるということ。です。

研究のはじめには、移民問題とか同化問題とか、それに付随する定住形態(チャイナタウン)とかの、かなり普遍的で定式化した判断が先にあつて、一九世紀から二〇世紀初めの華僑にしても、一般命題から派生した一つのパターンとして、ここにもある、あそこにもある、というように事例をつきとめてゆく、そういう研究時期があつたかと思えます。いまの「アジア経済の興隆のなかの華僑」という切り口にしても、一律で無差別に扱うところがなくてもいい。ですが、実体は意外に入り組んでいるのだということがやがて分かってくると、「差異発見的」と申

しますか、類別と比較を取り入れたような考察が増えてくるはず。労働移民にしても、同化の容易さや困難さや、チャイナタウンの形成にしても、はじめのプロセスや原因が同じであつても、結果としてはいろいろな形が実は生じうる、ということが指摘されつつあります。さらに一步を進めると、その差異にかかわる「変数」のいくつかをつきとめて総合判断、ないしは「多変量分析」をするようになります。

パパやプラナカンやメステイソがかつて生じたのは、居住国の宗教政策に関わるのか、中国からの女性の渡航が少ないという状況が続いたためなのか、華僑を位置づけた社会の成層の仕組みのためなのか、などです。宗教の政策や強制のあり方はタイ、マレー半島、ジャワ、フィリピンでかなり違います。タイやフィリピンでは結果としては土着化を進めたり、またジャワではプラナカン化を促しました。こうした変数の一つとして、居住する国や地域や都市での華僑・華人人口の総人口に対するその比率がどのくら

いかという点も、重要なことだと思っております。華僑の人口や総人口中の比率のいかんによって、現地の華僑・華人がおかれた社会的状況や問題処理のあり方が異なることがあります。これは王先生の著述の中でも触れておられます。

華僑・華人人口が絶対的に多い国では、彼らの社会的集団形成やその活動内容や中国人も異なるでしょう。その比率がたとえば三%ないしそれ以下の国々と一〇%の国々、さらに三〇%以上の国々があるわけですが、その比率によっても、彼らの生き方や存在が異なると思われま

す。
ですから東南アジア全体とそれ以外とは一律には扱えないし、東南アジアの中でもまず人口規模で分け、さらに文化・宗教、政策、華僑移住史の流れの差異などを類別し、いくつかわる変数の相関性を念頭におくことは必要ではないでしょうか。アメリカ、ヨーロッパ、東南アジアといった地域性が華僑・華人のそれぞれの国における社会集団の形成に及ぼす違いを考慮することも必要ではないかとい

うことです。

編 そうですね。私も同感です。人口類型面を分析の要因に加えるという点は、比較研究の重要な視点ではないでしょうか。

また先生のおっしゃる地域性に関しては、とくに東南アジアではグローバル化の影響で伝統的な社会構造が変容する過程にあり、国単位でみても華僑・華人の社会的移動や流動性が高まっていると言われます。その社会の変動のあり方に地域性がある以上、華僑・華人社会のあり方もその影響を受けるはずで、その視点を組み込むことは非常に重要だと思います。

ところで濱下先生、王先生や斯波先生のおっしゃったことを踏まえて、テーマに関する点について、ご発言願えますでしょうか。

◆「中国性」をどう捉えるか

濱下 シンガポールにおける華僑・華人のあり方も、広義には、実はマイノリティ

に属すると見なければならぬという王先生のお話は大変に興味深いことです。

この点について敷衍すれば、私にとって、華僑・華人のどのような人々がマイノリティあるいはマジョリティに属するかを、いかに純粹に区分するかということ是非常に難しい問題です。そしてシンガポールや他の東南アジアの国々で、華僑・華人をいかにして見分けるのか、これも難しい問題です。ときに彼らは、華僑・華人という定義よりは文化を共有する中国人といった方が適切な場合もあるわけです。それ自体が、海外で一つの中国世界を形成する場合があるということですから。したがって、海外の中国人について語る時、我々は広く大きな視野が必要になるのではないかと思います。

おそらくこうした問題を考えるとき、我々は彼らがその土地におかれた歴史的、文化的視野なども含めて考えるべきでしょう。私自身の見方では、彼らは時にマジョリティであり、時にマイノリティ、あるいは時に華僑や華人であったり、時にはその何れでもないが中国系の

人というように、多様な姿をもった存在に映ります。

彼らがマジオリティとして映る場合について言いますと、王先生がお触れになったように、こと東南アジアにおいて見るかぎり、一般的に言って、経済活動の分野では、非常に重要な役割を演じているということです。経済的な影響がなければ、このような位置を占めることは不可能でしょう。

しかし斯波先生が指摘になったように、華僑・華人の数や比率という点に視点を当てれば、確かにマイノリティに過ぎないわけです。

このように、華僑・華人はつねにマジオリティとマイノリティのあいだを揺れ動く存在だという側面をもっていると思います。こうした複雑さが、何をもって華僑や華人というのか、あるいは「中国性」(Chineseness)であるのかを純粹に見定める際の問題であり、それゆえにまた、一方ではその純粹化を行う方法を厳密に考える必要性を生んでいるともいえます。

ところが他方では、中国世界は非常に広く、東南アジアといわずいろいろな地域における中国の存在の意味は何かという点が、私を惹きつける問題となっています。特にいわゆるグローバルゼーションの進展は、こうした問題を考える際に考慮すべき動きです。これに伴って、中国世界がいつそう大きくなる可能性もあり、華僑・華人問題を多様かつ複雑なものにする要因になっているからです。

三年前のことになりますが、沖縄で開かれた林氏世界宗族会議は世界会議とは



濱下武志 [Hamashita Takeshi]

いえ地域性の強いものですが、そこで主張はグローバルなものでした。しかし、たとえば二年前シンガポールで開かれた広東商業者世界会議のような場合は、グローバルゼーションを考える際のさらによい例でした。広東は一地域ないしは一つの省に過ぎませんが、「僑居」の人々が多数存在する地域というイメージがあり、事実そうなのですが、ここに住む人々のダイナミズムをどう捉えるかという点は、グローバルゼーションと華僑・華人との関係を考える上で、私の関心の一つであり惹き付けられる問題になっています。

たとえば、地方的、国際的あるいはマジオリティ、マイノリティなどといったようなさまざまな局面におけるダイナミズムは華僑・華人研究法をめぐってもまた考慮しなければならぬことです。こうした問題を考えると、我々は、華僑・華人研究を行う際、何か単一のコアとなるものを持つだけでは不十分だと思います。

話がやや変わりますが、中国の北方で

も、この問題への関心が高まりつつあります。北京の社会科学院も華僑・華人研究を始めましたが比較的新しい取り組みです。これまでは華僑・華人研究といえば廈門大学や広東中山大学などで、さまざまな研究蓄積が見られました。北方ではそれほど盛んとは言えませんでした。しかし最近、この面での研究が盛んになりつつあります。華僑・華人研究に対する関心の高まりを反映したものとはいえます。そして、このテーマが中国国内での中国研究の中心の一つになる動きも見られます。

◆一種の国際関係研究

王先生が言われたように、華僑・華人研究法については、学者のあいだで、中国国内とそれ以外の地域とでは違いが見受けられます。ですからたとえば華僑・華人がたくさん住んでいるところにおける華僑・華人の研究は、研究上のコアのひとつになるのではないのでしょうか。この点は、斯波先生がご指摘の人口比率な

どの留意点とも関連します。私が申し上げたいことは、華僑・華人研究については、固有の研究法というものはないのではないかとことです。さまざまな局面や研究分野を考慮しなければならぬということ です。

つまり、華僑・華人の状況のすべてをカバーする単一の研究法は難しく、民族学、人類学、社会学、社会心理学など他の関連する諸領域を使いながら臨むのがいいだろうということです。華僑・華人研究に隣接するそうした諸分野との関連を持つことが重要だと思います。必要に応じて、これらの諸分野の研究法を取り入れるということです。しかも、華僑・華人研究は一種の国際関係研究でもあり、その変化との関連も視野におく必要があります。いうならば、これこそが華僑・華人研究法のある方だと思えます。このような取り組みは、ここにおいでの陳天璽さんが行っているような方法でもあると思います。

編 華僑・華人研究には関連する隣接諸科学の利用が不可欠で、研究対象や対象

とする国や地域にに応じて、方法も異なってくるというご意見だと思います。そうした性格を華僑・華人研究は持っているということだと理解いたしました。

また、華僑・華人研究は国際関係研究の一つだという視点は重要だと思います。特に、華僑・華人の海外での経済活動を観るまでもなく、その実態の意味は明白のように思います。

では、陳さんいかがでしょうか。

◆学際的研究の統合と「華僑学」

陳 王先生と濱下先生のご意見に賛成です。華僑・華人研究の領域や方法論に関する議論、もしくは今日のテーマである「華僑学」の構築は、難しい問題だと思います。

その大きな問題の一つに、華僑・華人研究は、ある意味で人間そのものを観ることでもあるからではないのでしょうか。

華僑・華人は実にさまざまな行動や思考を持っていますから、研究自体もそれに応じた多様な観点、多様な研究方法が必

要になります。たとえば華人経済を研究対象とした場合、単に経済活動を観るだけではなく、彼らのアイデンティティはもちろん、華僑・華人となった理由、彼らを取りまく歴史的環境の変化など、彼らに付随する多くの側面を見なければならず、しかもそれらはダイナミックなものであり、その変化をも捉える必要があります。経済学や政治学など単独のディシプリンでは人間の行動や思考を問題にする華僑・華人の研究の本質を掴めないのではないかと思います。しかも、彼らを持つ特有なダイナミックさ、つまり、可変性を持ったものであるということも意識する必要がありますね。そうした意味も含め、単独の「華僑学」を構築するというのは、大変難しいことであると再認識しています。

しかし、濱下先生のお話を参考にしますと、それぞれの分野の研究者の協力や専門家の学際的研究の統合によって、華僑・華人研究の一つの方法論として構成することは、理念的にはあり得るのではないかと思います。それぞれの異なった

観点を尊重しながら、共通の華僑・華人という対象について意見交換する、そこから華僑学の構築を試みるという方法です。

ところでマイノリティであるかマジョリティであるか区別が大切だとお話になった王先生にうかがいますが、広い意味での華僑学ができるとしたら、それは華僑・華人であってもマイノリティに属する人のみを研究対象とするということですか。というのは、香港の人たちを観察していると、カナダに移民した場合彼



陳 天璽 [Chen Tianshi]

らは確かにマイノリティになるのですが、香港へ帰るとマジョリティとなります。彼らは世界中を飛び回っており、ときにはマイノリティときにはマジョリティとなり、両者間を行き来していると思うのですが。

王 確かにそういう問題があります。そこが華僑・華人研究の難しいところなのです。常に流動的であるという点です。しかし、それ自身が研究の対象課題の一つなのでしょう。

陳 難しい問題ですね。ある人がマイノリティかマジョリティか、どの時点をとらえればよいのかなど、華僑・華人自体、非常に可変的な存在であるので。しかも、最近はいわゆる日本の新華僑のような存在も出現した新たな流れを生み出しています。華僑・華人問題はより複雑化しているように思います。

王 日本の新華僑の人口は、どのくらいなのでしょう。

陳 約三五万人といわれています。このような人々は、現在は日本に住んでいますが、やがてはその多くは中国へ帰りたい

いと思つている人もいれば、第三国に再移民したいと思つている人もいるようです。彼らはまさに華僑です。しかし、なかには日本国籍を取りたいと思つている人もいると思います。ですから希望はさまざまで、彼らを一つに括することも難しい状況です。

編 曾さんは傍聴というお立場でここにおられますが、いままでのご議論を聞いていて、いかがですか。

曾 私の研究テーマは華人問題ですが、いろいろと参考になることが多く勉強になります。華僑学の構築というテーマには大変関心がありますが、難しいテーマであることもよく分かりました。

濱下 曾さん、せっかくの機会ですから、もう少しあなたの研究テーマに即してご意見を言ってくれますか。今日の議論の参考になると思います。

曾 ありがとうございます。最近、私は博士論文を書いたのですが、テーマは「サンチエゴにおける中国人コミュニティ」というものです。といつてもこの論文に満足したわけではありません。今日の華



..... 曾 纓 [Ceng Ying]

僑・華人研究法のあり方という議論を聞いていて、そんな印象を持っています。

◆マイノリティ研究としての「華僑学」

王 このたび、愛知大学はICCS（国際中国学研究センター）という研究組織を立ち上げたと聞いていますが、これには大きな研究方法上の発展が期待できます。多面的な研究方法は中国研究の発展に寄与すると思つています。たとえば、中国問題についての研究は、中国人自身

による中国における中国研究とは区別されるべきだというのが私の考えです。というのは、マイノリティである中国人しかいない国での中国研究とマジヨリテイのなかの中国人による中国研究は異なるからです。

この点は、華僑・華人を含む概念的に広義の意味での中国人の行動様式を知る上で、重要な視点となるでしょう。というのは、彼らの行動様式は、おかれた環境、さまざまな条件の違いによつて異なる様相を見せているからです。

精神構造にはマイノリティとマジヨリテイとの間に違いがあります。その結果、行動様式にもマイノリティとマジヨリテイとの間に違いが生まれるのです。私のように長い間彼らと接触している者から見ると、これは明らかな違いです。

新華僑は本来、一時的な滞在者に多い現象です。しかし時間が立つにつれ、変わることもありえるでしょう。その意味では、見方を変え注目する必要があるます。彼らについては移民問題とは異なつた研究方法が求められているといえるで

しよう。

マイノリティ研究には、心理学的研究、社会心理学的研究、社会学的研究そして人類学的研究、政治学的研究、経済学的研究、政治的参加や政治的アイデンティティ研究など多くの分野からの接近が求められます。このような視点で研究できる局面で、マイノリティがいかなる行動をしているか、すでに文明社会の一定のルールの内部で生きている彼らが、その外部ではどのような行動様式を取っているのか、などです。繰り返しになります、この場合のマイノリティには香港や台湾は含まれません。

これらマイノリティの数がいま、増加しています。これらのマイノリティは、成長する社会を手に入れ、非常に活気ある条件のもとで生活しています。彼らが住む社会は非中国世界であり、与えられた政治制度の非中国社会で、いかに生きるかを学び、異なった経済ルールをつくり、さまざまな社会的規制を緩和し、そこでいかに自分の職業を見つめるか、いかにコミュニティをつくるか、いかに生

きる環境をよくするかに腐心するようになったのです。

こうした社会的条件の形成がなされた段階に到達しつつあることが、比較研究の成立を可能にする条件を与えていると思います。つまり地理的な環境の違いのもとで、それぞれの社会的枠組みを持つようになったマイノリティ社会を比較するということです。この視点が、華僑学の一つのあり方になるかもしれません。

◆比較研究の際の留意点

比較研究する場合、中国研究の方法として注意すべきことがあります。たとえばコーネル大学のモーリス・フリードマン (Maurice Freedman) グループは新中国成立後、外部の研究者が最初に行った人類学的方法を主とする中国研究として、非常に成熟した研究を行いました。しかし共産党はその研究をあまり重視しませんでした。そこでこのようなことを背景に、華僑・華人研究が東南アジアの多くの学者によって始められたのでし

た。その問題意識は、新中国が外部の中国人に対してどのような対応をするのか、ということでした。中国の外部に住む中国系の人々は、中国から引き裂かれたような状況でした。このような状況から、外部に住むこれらの人々には、何が「中国性」なのかという問題意識が生まれてきたのでした。それは矛盾に満ちた、困難な問題でした。

そうした経緯を経て現在は、中国を含めたグローバルゼーションの時代に突入しています。これはまったく当時とは異なった次元の話です。マジョリティあるいはマイノリティとして、それぞれの立場から中国系の人々はなんらかの役割を担っているといえるでしょう。非常にダイナミックなそして柔軟なものです。ここでは国境は低くなっていますから、民族主義の出る幕は少なくなっています。中国人に限らず人々の移民機会は増え、こうした変化のもとで中国人の移民問題は一つのケーススタディとして取り上げることができるようになりました。中国人はこの点に関して長い歴史をもってい

るからです。しかも民族主義が台頭する以前の移民という、現在と似た環境の歴史をも含んでいますから。

このような現代は、新しい問題を提起しています。だがが中国人でだがが中国人でないのか、という定義の方法上の問題です。そしてこうした中で、中国に依拠するということの意味が再び問われだしているといえます。この問題は、中国の国家的アイデンティティとは何か、という問題提起をしているともいえます。そしてこの問題が重要であるかどうかは中国自身にかかっているのです。

中国には非漢族が多数いますが、かりに民族主義を強調するかどうかという問題が起るか。この問題は中国の国家としてのアイデンティティの醸成を難しくしています。中国にとっては厄介な問題です。民族を強調しても国境を強調してもいずれも問題が残る。国境を強調すれば、外部の中国系の人々との国家的関係は存在しなくなります。そこで華僑が鍵となるのです。

編 条件次第でマイノリティとマジョリ

ティとしての両方のビヘイビアを持つという、王先生と濱下先生のご意見は重要な視点だと思ひながら拝聴いたしました。マイノリティ、マジョリティといつても固定的なものではないということですね。この点はさきほどの陳さんのご質問へのお答えにもなると思います。

こうした点を考慮しないと、華僑学構築の試みはうまくいかないとということですね。また彼らのビヘイビアを規定しているさまざまな政治的、経済的、社会的、歴史的その他の諸要因を考慮するべきだという点も同感です。敷衍すれば、中国の華僑政策や国内事情も考慮する必要があるということでしょう。

ところで濱下先生がお触れになったことですが、華僑・華人研究法を考える上で重要だと言われた研究上のコアあるいは研究方法というのをどのように見たらいいのでしょうか。華僑学構築の試みという点から見て、それをどう捉えたらいいのでしょうか。

この点、斯波先生どのようなご意見をお持ちでしょうか。

◆「シノロギー」の伝統と史料の重要性

斯波 日本のもこれまでの研究方法の流れから見ると、学際的なし学融合的なマルチ・ディシプリンを組み合わせるという方法は、まだよく熟していないと思われます。日本でこれまで華僑・華人研究の基礎を作ってきたものには、まず近現代中国の商業経済調査、貿易調査の流れ、日中間の政治交渉研究の流れ、江戸・明治・大正期にかけての日中経済交渉史研究の流れ、長崎・阪神・横浜・函館の歴史編纂の流れ、それに東洋史家のうち商業貿易史を研究する流れがあり、また第二次大戦中になされた東南アジアや日本の華僑研究の一群があります。歴史家と商業実務調査の専門家がリードしてきました。戦後になって、国際関係論、人類学、開発経済学を背景とする研究者が輩出する一方で、歴史家の側も単なる東洋史や日本史の枠を超え、社会科学の方法や発想、広域的な視野を身につけた世代が研究の主力となってきました。ですか

ら、学際研究はまだ生まれて間もないという状況です。

研究上の問題点で二つのことが当面いえます。私が思うには、新しい華僑学の構築を試みるという場合に、まず「シノロジー」の作った伝統を抜きにして考えるべきではないということです。というのは、華僑・華人の大多数はいわゆる「常民」なのですが、中国の伝統的な学問（漢学）の流れには、常民の記録は極めて乏しい、しかも海外貿易とか海外移民についても、まとまった知識を蓄積して来ませんでした。この関係の知識はむしろ「シノロジー」の中で育ち、第二次大戦前後から、英米独の学者が民族学、人類学、国際金融、国際経済の角度から研究を進めて来ました。この流れをどう吸収し取り入れてゆくかがひとつの課題です。

一方、清末までの「漢学」が歴史史料、歴史知識としてはあまり頼れないにしても、辛亥革命以後の中国人研究者が近代的な知識を取り入れて再構成している学問「中国学」は十分活用しなければなりません。人類学や社会学、経済学の立場

で、多角的にまた柔軟に研究する業績が充実してきたのは案外に新しく、「漢学」的な発想はまだかなり残ってはいませんが、なにしろ華僑・華人問題はなかなか中国に発源する研究分野ですから、現代の中国学者の業績をできるだけ摂取するべきです。注意すべき点は「漢学」に固有であった自民族中心主義の考え、その裏返しといえる国際比較への消極性でしょう。

史料収集とそれに依拠した研究は「中国研究」において非常に重要であり、その視点を欠いた華僑・華人研究は科学的な根拠を持つ研究方法として認知されないのではないかと思います。華僑・華人そのものについての知識・記録の蓄積と整理については、「漢学」にだけは頼れず、むしろ周辺のアジアに残された記録、西洋人の記録を活用しなければなりませんし、学際研究ということでは、もともと中国以外で始められディシプリンが形成されてきた社会科学的な知識を動員して使うこととなります。国際的な協調や比較を駆使することがどうしても避けられ

ないのではないのでしょうか。

編 この点は斯波先生のご持論です。これまでのご議論を要約いたしますと、英米独の学者が中心の「シノロジー」の成果、中国学者による辛亥革命以降の中国学の活用、学際的な要素を持つ現代的な社会科学的な知識の国際的な協調、そして「常民」としての華僑・華人を対象とする史料収集・分析の重要性という、華僑・華人研究のあり方をめぐっての具体的な方法上の提起がありました。

陳さんこの点について、どう思われますか。



高橋五郎 [Takahashi Goro]

すか。

陳 斯波先生のご提案である、各華僑・華人の個人的な史料の収集、そしてそれらの比較分析は大切な研究方法であると思います。つまりケーススタディの比較を通し、ある種の理論やモデルに発展させるという方法があるのではないかと思えます。そこに、華僑学の構築へのヒントがあるようにも思いますが。

斯波先生がお話しになられた観点からの中国学について、肯定的な意味で非常に関心があります。

もう少し、逆にお尋ねしたいのですが、中国学の基底にある研究方法をどう理解したらよいのでしょうか。

編 この点は、今日の議論の中心的な、重要な問題の一つです。

陳 もし従来の中国学に、いま議論している華僑学と同じスタイルの研究方法があるとするば、この両者をどのように区分すべきなのでしょうか。

編 陳さんの疑問は、その通りだと思います。しかしその場合には、華僑学を中国学の発展を踏まえた中国研究の一構成

分野ないしは密接に関連する隣接科学として位置づけられたいと思います。いま斯波先生がいわれたことについて、王先生はどのように考えておられますか。

王 シノロジは斯波先生がいわれたように、西欧的学問です。それは中国を西欧的見方で見た伝統学といっていいもので、歴史、哲学、中国の伝統的人間学的な見方を合体すべきものですが、西欧的学問は中国の伝統にばかり目を向けたものです。彼らの中国学の方法は、文献類をテキストを用いながら学び、シノロジと呼ばれる内容をそれなりに切り開いていきました。それが中心であったのですが、その方法を彼らが学んだのは華僑・華人を通してでした。彼らは中国語のテキストのほとんどを読まねばなりませんでした。

しかし全員がそうできたわけではなく、ほんの少数です。そこで残りの多くの中国研究者は中国の古典を想像しながら理解しようとするしかなかった。その文化、歴史、文学、哲学その他の多くの知識を吸収する主たる方法は、『四庫全

書』によるものでした。彼らのうち中国語の読める者はそのすべてに目を通しました。それがシノロジです。

ですからシノロジには、マルチ・ディシプリンといった近代的な学問的方法や思考方法は希薄でした。それは、一種の古典学といっていいものでした。これを学ぶために、多くの欧米の学者はオックスフォードやケンブリッジへ行つたのでした。そして多くは哲学者でそこには科学的方法が希薄でした。そこで社会科学が伝統学に置き換わる必要が生まれました。それが新しい学問分野を生み出す働きをしたのです。

今日、中国研究は社会科学的学問としての挑戦を始めました。現にアメリカやヨーロッパで、今日の中国研究は厳格になり、社会科学としての実証性を重視するようになりました。その背景には、中国を経済学的、社会学的、政治学的、人類学的などの手法で考察するようになったことがあります。これがマルチ・ディシプリンの形の一つともいえるでしょう。

また国際的な移民が進む現在、たとえばヨーロッパでのモスリムと中国人社会との比較研究も必要でしょう。宗教的社会と非宗教的社会のあり方などが生み出す相違です。その場合、やはりさきほど話したように、社会学、経済学、政治学、人類学といった分野からのアプローチが不可欠です。

◆法律学的視点の重要性

陳 法学など法的问题もあると思います
が。

王 そうです。特に東南アジアではそう
です。法律面からの研究がもっと重要な
仕事になります。というのは、東南アジ
アでは華僑・華人をめぐる法律的问题
がたくさんあるからです。たとえばイン
ドネシアがそうですが、そこではいかに
中国人を定義するか、という根源的で現
実的な問題が法律問題として現れまし
た。これもまた興味ある課題です。

陳 法的な問題ですが、それはまさに私
が最近取り組んでいる問題です。これま

で華僑・華人研究はいろいろとされて来
ましたが、法的な問題に関する研究は限
られているという印象を持っています。
最近、日本の華僑・華人の法的立場につ
いて調べております。というのも、華僑
の人で日本では法的には無国籍である人
がいるのです。特に中華民国の国籍を
持っていた人に多いのですが、一九七二
年に日本と中華民国が国交を断絶したあ
と、中華民国国籍を維持できなくなった
華僑がいます。こうした問題を身近に経
験している身として、法的な観点も「華
僑学」の視野にいれる必要があると思
います。

王 だとすると、いまあなたは中国のバ
スポートを持っているのですか。
陳 一九七二年に台湾と断交した際、日
本政府は中華民国国籍を持つ華僑に、日
本国籍か中国籍かどちらかを選ばせたの
ですが、私の家族はいずれも選ばせな
かったです。だからいまは中華民国が海外華
僑に発行するバスポートを所持していま
す。

しかしそれは台湾人が持っているパス

ポートとは違っているようで、台湾へ行
くにはビザが必要です、停留できる期間
もあります。台湾の出入国管理窓口まで
行って、ビザがないために入国できず
シヨックを受けた経験があります。

王 イギリスのバスポートを持った香港
人と同じですね。彼らは香港バスポート
だけでは、イギリスに入国できませんか
ら。

陳 台湾と同じように、バスポートとと
もにビザが必要なんです。

編 多くの制約があるものですね。とこ
ろで失礼かもしれませんが、いろいろと
困難な体験をお持ちになって、陳さんは
ご自分は何人だと思っておられますか。
陳 私は、うーん。どう答えたらいいの
でしょうか。

私 は外国で、「Where are you from?」と
尋ねられた場合、「どの場所から来たかを
聞いているのか、それとも国籍か。それ
とも民族か」と、さまざまな方法で問い
返しますね。

編 なるほど……。こうした質問に答え
るのは、難しいということですね。

陳 そうなんです。ですから、私はJBC（日本生まれの中国人）と答えること
もありません。

王 ABC（アメリカ生まれの中国人）
ではなく、あなたはJBC。そういうい
い方があるのですか。

◆華僑・華人研究のもう一つの意味

編 ところで、濱下先生は、さきほど何
らかのディシプリンなしに、新しい華僑
研究法を構築する試みは非常に難しいと
言われました。私も同意するところがあ
るのでお聞きしますが、そのディシプリ
ンとはどのようなものを指すのか、ある
いは研究上のコアとなるものとはどうい
うものをお考えてでしょうか。民族学、社
会人類学、経済学、政治学、歴史学等々、
華僑・華人研究を行う際に関連する分野
のことと考えてよろしいのでしょうか。
濱下 そうです。しかし私の場合、そう
いったディシプリンを最優先的に考えて
いるわけではありません。華僑・華人研
究のベースになるいわゆるディシプリン

のあり方を批判的に捉え直す必要がある
ということ。そうしないと華僑・華
人研究の進展は難しいという意味です。
その場合のディシプリンとは、一九世紀
以降の西欧社会モデルを基礎に持つ現在
の学問的ディシプリンそのままを意味し
ます。

同時に、もし我々が華僑・華人研究を
あるディシプリンの枠内に押し込めてし
まうようなことになると、さきほどいつ
たダイナミズムを無視することになると
思います。そしてすでに言いましたよう
に、さまざまな分野が統合された学際的
方法は明らかに有効であると思います。
私は、華僑・華人研究に関連する諸学問
の連携が必要だと思うのです。これが華
僑・華人研究の方法をより向上させるた
めの一つのあり方ではないかと思いま
す。

しかし本日、私達はこの点を含め非常
に興味ある議論を進めていると思いま
す。たとえばス波先生が言われた中国学
はそのいい例です。日本では江戸時代か
ら漢学という分野もあったわけですが、

それは西欧式の学問ではないという特徴
を持っています。時代の変化とともに、
中国研究の方法は変化を見せて行つたわ
けですが、その思考方法には注目すべき
点があるのではないかと思います。明治
時代から、日本では中国研究の視点が「漢
学」から「東洋史」へと変わっていきま
すが、これは日本の近代化という時代性
を反映したものです。現在あらためて中
国学的思考方法を取り入れたものについ
ての再評価が必要になっていないと思いま
す。

この点は、現代の中国の大きな変化を
いかに評価するかという点に、一脈通ず
る歴史的視角を見出すこともできるので
はないかと思えます。たとえば現代中国
の経済発展を長期の歴史と分析視角の変
化の中でいかに評価するか、という点な
どもにも通ずる点があると思えます。こ
うした見方は、中国研究はもちろん、華僑・
華人研究の強化にも役立つはずで

す。彼らはネットワーク、とくに金融面で
広いネットワークを持っています。マイ
ノリティ経済なのです。香港と台湾

経済は私自身の見方では大きく中国経済の一部ですが、華僑経済もまた中国経済の一部ということになります。

そこで、もしこれらの経済的概念を広く中国研究のなかに取り入れるとするならば、単なる中国国内研究ではなく、異なった次元で捉える必要もあると思います。その次元とは華僑研究のあり方のことです。そしてそれは、明治期以降の日本国家そのものを、華僑・華人研究を含む中国研究をベースにして再検討することに通じることでもあると思います。当時の日本はナショナリズムの形成過程にあり、同様の過程は、華僑・華人研究を通して、現在の中国を見ることにもつながるように思います。

編 華僑・華人研究の意味が持つ幅広さ
をうかがったように思います。また、近代化以降の日本国家そのものを華僑・華人研究を通して再評価できるというご意見には、新しい華僑学の視座を見たように思います。同時に、敷衍すれば華僑・華人研究と国家論的視野との関係論も必要になると思いました。

曾さん、なにかご意見はありませんか。曾 日本における華僑・華人研究は他の国に比べて大変進んでいると思います。

たとえば私の住んでいるアメリカの華僑・華人研究者は、日本ほど深い研究をしているとは思えません。おおむね日本の研究は盛んですし業績も多いと思います。

日本の華僑・華人研究者はさまざまな視野を持っています。問題は世界中の研究者からその実態が認められていないところがある点です。愛知大学のICCSがその中心になり、日本の華僑・華人研究の成果を世界に向け発信できるように期待しています。

編 ありがとうございます。

ところで、濱下先生の言われた華僑学研究の枠組みや意味に関するお話、その場合のデイシプリンとはどういう意味であるか分かりました。西欧的なデイシプリンを利用することについての留意や問題点、アジア的なデイシプリンの重要性、日本においては、明治期以降の中国研究のあり方、国家像の変化との華僑・華人

研究の関連など、興味深いお話を聞くことができました。

そうすると、アジア的なデイシプリンや理論をベースにした華僑・華人研究のあり方を、もう少し踏み込んでお話しただけですでしょうか。たとえば韓国、中国、東南アジアなどに共通するアジア的なデイシプリンに立脚した研究方法とはどんなものなのでしょうか。

濱下 私はデイシプリンに関して、それほど強くアジアはアジア、日本は日本といったような地域性を強調しているわけではありません。この種の議論はかなり長く行われてきましたが、私は決して西欧と非西欧あるいは東方といったように明確に区分し比較できるとは思いません。おそらく、移民問題研究、民族問題研究、そしてこれまでの華僑・華人研究には、アジアをベースにした研究が見られたと思います。一つは、東南アジアにおける同化問題あるいはアイデンティティ問題ですね。また移民問題も大きな研究課題でした。そしてその背景には戦後のアメリカのアジア政策や冷戦構造も

国を含む経済圏形成というダイナミズムを仲介する作用を見せるようになったといえます。こうした観点から、華僑・華人研究のまた一つ新しい視座が見えてくるように思います。

したがって、華僑・華人のネットワークは内的に直接的な相互依存を持つものから、競争しながらそれぞれ中国との関係を深めるといふ、対外的・間接的なネットワークに変化しつつあるというのが私の認識です。それは市場経済のグローバルリズム作用が与える帰結の一つではないかと思えます。

本日のテーマである華僑学の構築という問題に即していいますと、こうした経済動向の世界的変化の過程で、なにか抽象的な理論を見出せないものでしょうか。単純にすぎるかもしれませんが、華僑・華人・華裔という縦軸の変化をもたらす要因分析、そしてそれぞれが中国と関わる際のさまざまな局面での行動原理やパターンがどのような性格を持つか、などマトリックス的考察による抽象化作業の可能性です。

一つの仮説として私は、華僑を中心として、中国の政治や経済の動向との相互作用を持ちつつ、国土という概念に束縛されない次元での、ある種の求心力を持った中華圏が形成されているのではないかと思っています。抽象化とはこの次元の中華圏を分析して理論化するということです。

王 あなたの問題意識はよく分かります。この図の最上部に描いてある華裔はすでに同化しているか、その方向に進み、居住国のネイティブとなる。華人もやがては華裔と同じ方向を歩むわけです。このような動きが実態でなし理論としていいのではないのでしょうか。

曾 分かりました。でもこの図ではなぜアジア人だけしか描いていないのですか。華僑・華人・華裔は、世界中に住んでいるのではないんですか。編 そうです。この図は平面図として描いているためそう見えるのですが、円錐形をイメージして下さい。この図では見えない国が背面にあると考えて下さい。

中国大陸では華僑・華人について固有の定義を行っていますが、これは華僑政策というか、国籍法の制定と関係しています。しかし実際はさまざまな見方の華僑・華人研究があることも事実です。華僑・華人自体が流動的ですから、この図のように単線的、一方向的に動くとは限りません。この点が理論化の可能性を考えることが難しい所以です。

斯波 私が思うには、さらに経済的条件、政治的状況、人類学的視点、社会学的観点、そして歴史的観点などを考慮すべきでしょう。しかしこの図が示す考え方は、非常に積極的な意味があるように思えます。

なお編集部への質問に答える意味で言いますと、私は華僑研究の方法についてさらに議論したいと思えます。この意味で、華僑の行動に関する歴史的記録の研究が、絶対に不可欠だという点が私の基本的な主張です。そしていかに華僑・華人の個人的な記録や資料を集めるか、という点もこれまで十分に理解されているとは言えません。

◆「華僑・華人」、「漢」と「華」

王 その点は大変大事な点です。ところで日本語で「華僑」と言った場合、多くのことが含意されているように思えるのですがどうですか。というのは、中国語においても最近では異なった含意があるようになってきているからです。

編 多くの日本人学者は中国式の定義に依っているようですが、実際は多くのことが含意されています。しかし必ずしも一般化された含意はありません。華僑と華人を区別する必要があるのは国籍の問題だけで、他にどんな意味があるのか迷うこともあります。

王 シンガポールその他の場所で気が付いたことがあるのですが、やはりどう表現するのがいいのかということ。いずれにしても、彼らは中国の外ではマイノリティだということ。『華族』という場合、マイノリティもマジョリティも含めた中国人の呼び方でいいのでしょうか。しかし華族というと日本のかつての

エリート集団を指しますよね。中国語では、華族は少数民族としてのマイノリティという意味を含んでいるのです。また中国以外に住む中国人の子孫全体をさすのが一般的理解です。

現在これだけグローバルな時代になると、一つの変化が起きていることに注意すべきです。つまり移民する必要がなくなりつつあり、一時的滞在者としてとどまる者が多くなつた。というのは、国境を越えての行き来がかつてほど厳しい制限を持たなくなつたからです。この意味で、だれもが一時的滞在者となり得るのです。移民というのはそこで住むことです。一時的滞在者の場合はいつでも好きな時に移動する人ですね。自分自身にもそういうところがある。そういう意味でも、移民というよりも一時的滞在者という選択をする者が増えているといえます。現代は「僑」という側面が大きく膨らむ時代ということ。私には最近、新しく辞書を買つたのですが、華僑と華人は同じ説明です。日本人には区別の必要性は薄いということ。

示しているのではないのでしょうか。

斯波 多くの日本人は、華僑と華人を概念的に区別してないのが現状ですね。

編 この言葉の違いを、どのような基準で、どう説明したらいいのでしょうか。華僑も華人も居住国では同じ活動をし、居住国の人にとっては中国人に変わりのないという印象があると思います。この点は日本だけでなく、東南アジア共通の意識です。

王 ご承知のように、中国では、華人は中国籍のない海外に住む中国系の人、華僑は海外に住む中国籍を持つ者という区別だけです。しかし国籍がそれほど大切かという点は少し疑問です。少なくとも学問的にはそうした疑問が残る。

編 王先生は、華人と華僑を概念的に区別すべきだと思われれますか。

王 中国には、この二つの言葉は区別する理由があります。在外の中国大使館は、同じ中国系の人であっても華僑と華人は明確に区別しますね。というのは、華僑に対して中国政府は保護責任があるけれども、華人に対しては一切ないからです。

最近ジャカルタで起きた事件では、事に巻き込まれた華僑は助け出しましたが、華人は中国の国籍はないから国籍を持つインドネシア政府が保護すべきだという姿勢をとった事例がありました。これは、中国政府がインドネシア政府に対して、正式に表明した態度でした。結局、事件に巻き込まれた華人を救ったのはインドネシアの華僑・華人自身だったのです。

このような具体的な事件が起きると、華僑と華人の区別が中国によって分けられることとなります。学問的な意味があるかどうかには関係がありません。

シンガポールでは「華」の系列に属する人も国籍を取れば、あたりまえのようですが、すでに中国とは関係のないシンガポール人です。関連しますが「漢族」と「華族」は別の概念です。「華」は清代に区別して使われるようになり、「漢」とは異なった意味があります。「華」は、根源に中国文化を持つ人と理解されるようになり、「漢」というマジョリテイ抜きでも妥当する用語です。外国には「華」と

「漢」を混同する人もいますが、明確に分けることが大切だと思います。

陳 二〇〇二年にオーストラリア国立大学で開催された、中国ディアスポラのエスニック・マイノリティに関する学会で多くの研究者が報告をしました。そのほとんどは漢族ではない人に関する研究でした。その会議に参加し、華僑・華人研究をしてきた立場から、こうした非漢族のエスニック・マイノリティが海外に行った場合、彼らをいっただいどう定義すべきかと思つたのです。彼らは華人ではあるけれど、漢族ではないからです。これまで華僑・華人研究は、漢族を主な研究対象にしてきましたから。

編 陳さんのお話に関連しますが、たとえば「Ethnic Chinese」あるいは「Non Han Chinese Minority」のことを、日本語ではもっともそのニュアンスを反映したままどう訳したらいいのでしょうか。

王 日本では漢族だけでなく満族の子孫も華僑・華人としているはずですが、区別は難しいでしょうね。

曾 「Ethnic Chinese」のことですけれど、

「華族」としたらいかがでしょうか。編 華族と訳すと、王先生も言われたようにかつての貴族の「華族」と混同されやすい。華僑と華人双方を含意する言葉はないのでしょうか。

曾 「中国系人」ならいいと思いますけれど。編 では日系人ならぬ、「中系人」はどうでしょうか。アメリカでは「Chinese American」ともいうでしょう。

王 私自身は中国人子孫だと思えます。華人に属します。そして中国以外の国に住む中国人という言い方も当てはまりません。マイノリティです。中国に住む人々はマジョリテイです。こういう区分が有効ではないかと思えます。

曾 華人を「Chinese Overseas」という意味で使うと問題もあります。オーストラリアへ行った私の友人は、華人と呼ぶと「華人というのは、中国人のことですよ」と。彼女には、すでに自分が中国系の間である意識すらないのです。

王 それは問題です。しかし現実にはそれほど厳格には区別していいというこ

とでしよう。中国人と華人は区別しなくてはなりません。華人は非中国人であり、中国人は中華人民共和国人のことを指します。香港、マカオはもちろん中国人です。

◆華裔研究の視点

陳 華裔についてはどうですか。

王 華裔は、本日のテーマに関連する研究課題の一つです。華裔は細いけれども中国人の血縁を持つという意味ですから、いくつもの世代が過ぎています。そして彼らはすでに中国人ではないのです。

中国人ではないという意味は、彼らは中国には関心がないということですか。中国には関心がないということですか。すでに住んでいる国に同化しています。たとえばフィリピンのコラソン・アキノ元大統領は華裔、フィリピン人です。彼女に中国人という意識はありません。

しかしまだ中国人だという意識を持っている華人もいます。この点が華僑・華人研究の課題の一つになります。華人と華裔の区別をどこでどのように線を引き

のか。この問題を、多くの華裔が住む東南アジア諸国全体を見ながら考えることが大切です。この点で参考になる基準は宗教でしょう。特にモスリムの国では、比較的、境界がはっきりする場所があるからです。そこではモスリムになった人々が中国人子孫であることを否定する場所が多いのです。

陳 それは非常に興味深いことです。なぜなら、華裔と華人とのあいだに線を引きくことは難しいと思うからです。華裔は場合によって華人に再び戻ることもありうるからです。それくらい流動性が高い意識次第という側面があります。

王 そういうこともあります。

陳 トリニダード出身の人の例ですが、その人はどう見てもいわゆる中国系の人には見えないのですが、私が華人アイデンティティの研究に従事しているという点、その人は「私は中国研究のため、中国にも留学したチャイニーズです、私もあなたの研究対象になりますね」というのです。私は彼が中国に関する知識や言語能力をもち、中国的なものを感じ取る

ことはできませんでした。話を聞いていると彼が中国留学を経て華裔から華人へと戻ったのではないかと思いました。華裔から華人への変化もダイナミックなものです。両者間に明確な、固定的な線を引きくことの難しさを感じました。

編 なぜ彼らはそうもたやすく両者の間を行ったり来たりするのでしょうかね。

陳 彼ら自身、華僑、華人、華裔という言葉の違いを知らないのかもしれないし、意識してないのでしよう。無意識のうちに変化しているのではないのでしょうか。しかも私が例にあげた人は黒人で、私にはとても彼が中国人の子孫とは思えませんでした。そうした意味で、他者がどう認識するかという問題もありますね。

王 キューバで体験したことで、ある二人の将軍と会う機会がありました。彼はカストロ氏と親密な間柄の人で、一人は中国人混血、もう一人は純粹な血統の広東人でした。しかし二人とも中国語は話しません。しかし彼らは華裔なのです。華裔であることを誇りにしている風

情でした。このように華裔は中国人子孫であることは意識しているのです。

重要なことは、中国人子孫であることを先に意識するか、キューバ人であることをまず意識するかという点です。ジャワ島にも多数の中国人子孫が住んでいますが、彼らには中国人子孫であることを認めようという人が多い。しかしジャワの人々は彼らが中国人子孫であることを皆知っています。華人、華裔はその人の意識の持ち方で両方になりうるのです。ですからその意識の変化を生む要因を研究することが課題です。

ス波 王先生に同感です。これは非常に有効な方法だと思います。華裔と華人の定義自体、国ごとの条件次第でさまざまでありうるように思います。

濱下 我々にとって中国の外に住む華僑・華人といった存在は、中国の内的伝統を担う人々といった方がよいかもしれません。彼らのアイデンティティは非常に理解が難しい。

王 現在の世界では、誰もが中国人と呼ばれる状況にある……。

陳 そうです。中国語を話し、一年中外国を飛び回っておられる濱下先生も、その意味では華僑と呼べるかもしれませんね。

濱下 そう。私は華僑かもしれません。編 最後の方はなにか冗談じみた話になりましたが、そこにも真理の一端が隠されているかもしれません。

今日は、華僑学の構築をめぐつてさまざまな議論を展開していただきました。

王先生、ス波先生、濱下先生がご指摘された、華僑・華人研究に関連するさまざまなディシプリンと中国学との兼ね合いの問題は興味ある提起だったと思います。また、ス波先生の言われた華僑・華人の個人史的資料や記録の収集と積み上げによる研究法は、華僑学構築をめぐつて新しい研究上の視座や方法について示唆深いものがあると思います。また陳さんからは、とくに華人・華裔の相互移動性についてなど、多々鋭いご指摘がありました。

これだけの大きなテーマを短時間の議論で、目に見える成果を上げるとは難

しいことですが、いくつかの重要な論点
が浮かび上がったように思います。ここ
で終わらせるには残念ですが、本日はこ
の辺で終わりにしたいと思います。あり
がとうございました。

（二〇〇二年一月二日）
（英語にて座談。邦訳：高橋五郎）